

土 淨



十月號

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一週一日發行）
 昭和二十一年四月二十八日逕報省特別授承認雜誌第三五二號
 昭和三十一年九月二十五日印刷
 昭和三十一年十月一日發行

第二十二卷

第十號

御歌

露の身は

こゝかしこにて

消えぬとも

心は同じ

花のうてなぞ

目次

巻頭言……………(1)

お十夜の話……………大野法道……………(2)

十夜法要の解説……………吉水大信……………(4)

養老事業と念佛信仰……………川瀬法圓……………(7)

回顧 保護司三十年……………林田智源……………(13)

児童福祉にささげるまでの
私の幼少年時代の環境……………小川金英……………(16)

ホノルル通信——第六信——……………松濤弘道……………(20)

信心要訣——念佛行者の記録——……………安居香山……………(22)

眞葛ヶ原問答……………萩行建堂……………(28)

その他讀書案内

淨土教は國際性を持つか

戦後、ヨーロッパやアメリカで佛教が見直され、次第に多くの同感者や研究者が増していることは喜ばしい。しかし歐米の佛教に對する人氣や好氣心は、主に原始佛教の教理や禪に對してであつて、淨土教に對してではないようである。原始佛教の合理主義的傾向や禪の冥想的特色が歐米の文化の性格と相通するところがあつて、それが歐米人をして佛教に關心を寄せるようにさせたのであることは理解するに難くないが、淨土教はそういう國際性を持たないのであろうか。

わが國に出生した日本淨土教は全く獨自の性格を持つてゐる。それは原始佛教や南方佛教とは全く違つた優婆塞^{うはさく}佛教、信徒佛教であつて、出家佛教ではない。近頃、東南アジアの佛教徒との交渉や交歓が盛んになるに従つて、原始佛教の風格を最もよく傳えているといわれる南方佛教の冥想的、戒律主義的な特色と比較されて、日常の生産消費の生活一つに融けあつてゐる淨土教の在家佛教的性格が反省されているが、この日常生活に融け込んで、賢愚大衆を信仰的に生かすところに、淨土教の本來性がある。浮き世離れた「靜かなる喜び」ばかりが佛教ではない。あわただしく動き悩む現實を慰め導く信仰を與えることがこれからの佛教である。

こういう特色は、印度にも南方にも中國にもかつてなかつたことで、もし歐米人がこの日本淨土教の特色を理解したならば、多くの共感、關心を寄せるであらう。戦後、これを理解させる努力は全く行われていながつたが、差し當り、法然上人七百五十年御忌の記念事業の目標の一つはここに置かれるべきである(佐藤賢順)

お十夜の話

大野 法 道



みのりの秋の十月は、稻田をわたる金風の、肌ざわりもさわやかに、夜ごとくくに、鳴く虫もしげくなり、時には寒さを感じることもあつたりして、そゞろに身の引きしまる感じになります。この月になると、浄土宗の寺々では、毎年の行事として「お十夜」の法要がつとまります。

これはまた「十夜念佛」とか、「十夜講」などとも言われますが、委しくいうと「十日十夜法要」で、昔は十日にわたつて勤めたのでありますが、今は三日間、または一日などとなつております。その日取りも、今はお寺によつて一定しませんけれども、もとは舊暦の十五日、つまり満月

の日に終るようにつとめました。それというのは、この法要のころは、阿彌陀佛の大慈悲を、まどかな月の光りと受け取つて、感謝をささげることだからであります。

八月十五夜のお月見は言うまでもなく、九月十三夜にも月をめであるのでありますが、その次ぎの、漸く秋の深まつた十月の月に、信仰の心をかき立てた、昔の人の頓悟を見のがすことは出来ません。そこでお十夜は秋の風情の、ゆたかな行事として廣まり、多くの俳人の、十夜の句なども作られたりして、遂に俳諧歳時記に、その項目が載せられるところまで、進んで行つたのであります。

お十夜のこととが經文に出るのは、無量壽經に、この娑婆世界で十日十夜の間、善をするのは、佛の世界で千年するよりすぐれる。なぜというに、この世は悪が多く、悪を避けて善をするには苦勞が要る。佛の世界では何の苦もなく善ができるからと説かれます。また鼓音聲陀羅尼經には、十日十夜に心をこめて念佛して、阿彌陀佛を拜むことができる。などと説かれます。

お十夜をつとめることは、日本に始まつたので、印度にも中國にもなかつたのであります。

それも、足利時代の永享年間(一四二九、六代義教の時)に、伊勢守貞國という人が、京都の眞如堂におこもりして専心に念佛し、靈夢を感じたことに始まり、その寺で毎年これをつとめ、特に比叡山に傳わる引聲念佛の作法を用いることになりました。

淨土宗で、之を全國にあまねく、つとめるようになった事の起りは、鎌倉の光明寺(淨土宗第三祖記主禪師のご遺跡)で、勅許によつて勤めたのが始めであります。光明寺の第八代に觀譽祐崇上人と申す、高德のお方がありました。明應四年(一四九五、足利十一代義澄の時)に、後土門天皇の勅を受け、宮中で眞如堂の法式によつて、之をつ

とめられました。その時に光明寺は勅願所に指定されてこれをつとめるお許しを得たので、それからこの宗の行事として、寺々に廣まつたのであります。

今も大本山光明寺のお十夜は有名であります。それというのは、前記の祐崇上人の時の行儀を、くすさずに傳えて居り、さびのある古式を見ることが出来ます。この寺のお十夜は十月十二日の初夜に始まつて、十五日の晨朝に終ります。十三日と十四日の初夜と日中法要は、

引聲念佛、同阿彌陀經、特殊作法の行道があり、鐘講(昔から打ち方を傳える在家の人)が打ち鳴らす、大雲板、大太鼓のひびきは、廣い境内にこだまして、他に見られな

い豪快なものであります。戦後は十三日に、英靈の冥福を念する追悼法要を加え、また一般の祖先のための施餓鬼を修行しますが、このお十夜の期間中は、さしにも大きい本堂も參詣やおこもりの人達、また武相詠歌會の人々で一ぱいであり、記主禪師の尊像をまつる開山堂も、奉納のご詠歌や舞踊で賑うのであります。

十夜法要の解説



吉 水 大 信

淨土宗に於て秋の行事、十月から十一月にかけて各寺に十夜法要が嚴修される。お十夜といはれているが具には十日十夜という意である。この法要は阿彌陀佛の一切衆生救済の大慈悲御誓願の完成、即ち成等正覺遊ばされたのを記念し又その廣大な慈恩に酬い奉る大法要である。

淨土宗の十夜法要根本道場たる、鎌倉大本山光明寺は、九代觀譽祐崇上人勅許により初められ、十月六日より十五日に至る十日十夜の法筵が催されていたが、時代の變遷によりてか今日では十月十二日初夜より十五日晨朝まで修行せられ、特に十三四日の兩日の日中法要は古式によつて行はれている。

宗門各寺にては日時を定めて一日一夜、或は三日三夜乃

至數日數夜の法要が營まれているのである。

この十日十夜の起原は人皇百一代、後花園天皇永享年中（五百二十年前）足利執權平貞經の弟貞國が佛道を求め淨土の法門を信じ、京都東山眞如堂（眞正極樂寺）に參籠せられた。本尊阿彌陀佛は慈覺大師が造立されたもので洵に靈驗ありといはれていた。

貞國が三日三夜の間念佛の修行をされたところ、如來より尊い瑞夢を感じた、法悦にうたれ非常に感激し、更に七日七夜の間念佛を修せられた、前後十日十夜の別時念佛會となつたのである。

爾來叡山の常行堂に行はれていた、引聲彌陀經、引聲念佛を眞如堂に遷し十月六日より十五日至るまで十日十夜の

法要が修せられて今日に及んでゐるわけである。

十日十夜のこと柄が無量壽經下巻に出ていて、その眞意は尊くも合致符合するものであると思う。

『此に於て善を修すること十日十夜すれば他方諸佛の國土に於て善をすること千歳するに勝れたり、所以は何ん他方の佛國は善をなす者は多く惡をなす者は少し、福德自然にして造惡なきの地なり唯此の間のみ惡多くして自然なること有ることなし』

この世にての十日十夜の善根は佛土の千年の善根に勝ると説かれる位、罪惡の環境煩惱具足の姿である現在の生活相である。こゝに阿彌陀佛の報身報土への救い、大善根である念佛によつて眞に共に生きる十日十夜の行事は他方佛土に於ての千年に勝るは當然のことである。即ち阿彌陀佛の大願業力によることである。十夜法要が報恩感謝の誠を捧げると同時に、日常生活が念佛生活となつてくるのである。

尙大阿彌陀經に『晝夜十日斷絶せざる者は壽終と即ち阿彌陀佛國に往生す』又鼓音聲陀羅尼經に『若し彼の佛の各號を受持するありと乃至十日十夜散亂を除捨し精勤に念佛三昧を修習す』等の十日十夜の語が出てゐる。

前に述べた通り淨土宗に十夜法要が嚴修されたのは勅許によるのである。それは人皇百二代後土御門天皇念佛門に入り給ひ教信深くあらせられた明應四年の春（五百六十年

前）淨土門の學匠鎌倉光明九代觀譽祐崇上人を宮中に召され、三七日の間阿彌陀經の講説をなされた。教感斜ならずして更に眞正極樂寺の例時の行法、引聲彌陀經引聲念佛の法要を宮中に催され觀譽上人その導師とせられ眞如堂の大衆を以て儀式を行はせられた。天皇は上人の講説と壯嚴な行儀に御感愈篤く、上人に對し希望を請えとの御詞があつたので、十月十夜の法要を所望された。天皇速に勅許せられ重ねて紫衣並に阿彌陀經を賜はる。これによつて光明寺に移し恒例の十夜法要となるのみでなく後一宗の法要となつたのである。

引聲彌陀經は仁明天皇承和五年（千百十五年前）慈覺大師圓仁が勅を奉じて入唐し、五台山、北台の普通院にて生身の文珠に遇うて極樂世界の八功德池の浪の音に曲をとり、阿彌陀經に譜曲したものである。笛をもてその諷誦の法を傳へられたものゝようである。その笛は象牙笛或は尺八と云うも兎に角笛が用いられたことゝ思う。

引聲念佛は曲を附して阿彌陀佛の名號を稱揚したもので慈覺大師が阿彌陀經と同じく五台山にて法道和尚より傳授したものである。

この引聲を慈覺大師仁壽元年（千五百年前）始めて叡山に行じ弟子に傳授した。後大原勝林院、京都眞如堂等諸所の常行堂にて修せられた。

彌陀經、念佛等緩緩な曲調の様子を

拾王集百首歌の中 (釋教の歌)

『立たちま杣まや南無阿彌陀佛のこえ引けば

西にいざなふ秋の夜の月』

王葉集 常行堂の引聲念佛を聴聞して (忠源の歌)

『夜もすがら西に心の引くこゑに

かよふ嵐の音を身にしむ』

と表現しているのである。

前述の通り觀譽祐崇上人により光明寺に傳えられたる引聲彌陀經念佛の十夜法要も、二百有餘年後になると多少衰頹の狀況であつた頃、中御門天皇享保十一年 (二百三十年前) 常陸の爪連ウツスナ常福寺の義譽觀徹上人が光明寺に轉住せられて、五十七代を繼ぎ、十夜復興の嘉運を開かれたのである。

觀徹上人は享保十年に三人の弟子、義春涼澄順徹を京都に使用して引聲を傳習研究せしめて一本を謄寫し版にし普及させられたので、以來今日に至るまで舊に復し十夜法要の古式が存續しているのである。

十夜法要の差定 (日中法要古式のもの)

一、三禮

一、四奉請 (導師登高座し洒水する稚兒十種供養、献茶、

淨箸する)

一、甲念佛

一、引聲彌陀經 (一節に笏を用う)

一、廻向文

一、法藏因彌遠の偈 (香盤行道になる)

一、引聲念佛 (行道 雲版大鼓)

一、六字詰念佛 (雲版大鼓双盤鈴) 行道終り着座す

一、授與十念

一、三禮

以上の差定にて今日嚴修されている。勿論天台の例時の行法差定より抜粹したものである。(三浦市 天陽院住職)

宗祖法然上人七百五十年御忌記念出版

淨土宗日常勤行式 (付和讃勤行式)

○定價 一部金三十五圓

十部以上三十二圓、百部以上三十圓

送料實費

○一萬部限定出版、豫約者多數につき御申込はお早く願います

○オフセット印刷、美麗折本 (香澤梵成師名筆)

お申込は

東京都港区芝公園十九號地

淨土宗務所教學部へ

養老事業と念佛信仰



川瀬法圓

(一)

多年愛讀させていただいた「浄土」誌に、養老事業と念佛信仰との關係に就いて述べる機會を與えられましたことを有難く感謝いたします。

始めに日本全國の養老施設の概觀を申述べまして、本論に入り、東京養老院と念佛信仰の事實そのまゝを述べさせていただきます。

浄土宗の念佛信仰につきましては、私は機會あるごとに宗門の諸大徳諸先輩の御意見を尋ねつつまいりましたので、大局に於て、大過なしとは考えていますが、私見の殘存をまぬかれませんか、諸先生から當院御育成のための御叱正を賜るよう懇願申上る次第です。

(二)

日本全國の養老施設數に就て、戦前と戦後との比較を御

覽に入れます。

全國養老事業協會の昭和十一年度調査に依りますと、當時全國で百十一施設ありました、そのうち公立が二十一施設、私立が九十施設あります、公立の四倍強を私立が占めていました。

佛教關係の養老施設は五十九施設でありました。昭和十九年度調査によると、十年間に十六施設を増加しています。

戦後十年、昭和三十年度厚生省調査によりますと、養老施設は全國で四百六十施設を數え、公立は三百六十四、私立は九十六であります。

公立と私立との割合は、公立が私立の三倍強の割合を示めしてありますので、戦前と戦後とを比較しますと、公私の施設の割合は略ぼ逆となつています。

戦後十年で、公立は、戦前二十一施設が三百六十四施設となりましたから、三百四十三施設が戦後に増設されたこと

となります。

佛教關係施設は戦後二十九施設あります。戦前の佛教關係は五十九、戦後は二十九でありますから、三十施設が消失している、其原因は、戦災に依るもの、戦後インフレによる經營不振によるもの、公立又組合立等に轉身したもの等。種々の原因があるであらう。

さて、その間にあつて、當院は二十年四月十三日の戦災に遭遇して、所有建物物資等全焼しましたが、増上寺の御好意により、一時立退いて養老事業を繼續いたし、六ヶ月間の御厄介を御掛けして終戦後十月に、鶴沼の適地二千餘坪に移轉し、復興して今日に到りました、當院は日本に於ける佛教養老事業を五十四年間守り通して参りました、東京都民生局に提出したる昭和三十年度當院總括入退人員表によれば、當院が五十三年間に收容したる老人延人員は貳百四拾壹萬五千參百拾五名に上つております。

尙戦前昭和十一年に於ける全國養老施設收容老人數は全國で四千六百八十七人でありましたが、戦後、昭和三十年には、二萬五千百六十七人であり、厚生省の發表によれば、今すぐに施設に入りたい老人數は、實に拾壹萬八千參百四拾四人と算定されています。

憲法第二十五條の國民の生活保障の條章からみて、政府は一段と、養老施設増設の爲めに努力を注ぐ義務を痛感しなくてはならないでしょう。

(三)

さて、全國の養老施設に關しては、以上の程度に止め、これから、院内に於ける、念佛信仰問題に限局して述べさせていただきます。

當院では、「人たる者は「佛」となることを以て理想とすること」及び「何人も、皆佛と作るべし」との信念の下に、養老事業を經營して居ります。

依て、私は友人知己の御導により、淨土宗管長故郁芳隨圓大僧正猊下の弟子となり、得度をなし、加行して、淨土宗の僧侶となりました。

終戦後、昭和二十年十月に養老事業地を神奈川縣藤澤市鶴沼と選定し、そのかなめともいうべき土地に、新に寺を開設いたしました。後日淨土宗から「法圓寺」という寺名を頂戴いたしました。

戦後の當院の復興の爲めに、千思萬考の結果、自ら藥師の座につきました、自らは獅子の座と恐懼しています、無量壽經に「常に大衆の中に於て、說法獅子吼しつゝ、一切の佛に供養する」とありますことを想浮いべつゝ……

昭和二十一年一月から、毎日曜日早朝念佛のおつとめ終了後、法然上人御法語の説教を初めて滿十年間實行してまいりました。

收容者には日課として朝三十分念佛を禮拜堂にて申すこ

と定め、次で朝と晩と二回とし、昭和二十三年頃からは朝五時起床五時半から六時半まで一時間、晩は六時から七時迄一時間、朝と晩と二回、年中無休で「おつとめ」をしてまいりました。

昭和二十三年十二月十二日、當院幹部三人は得度し加行して佛弟子となり、私は之等幹部の者と共に經營に當つています。

昭和二十四年頃から、念佛票と精勤念佛票とを考案發行して、毎日朝と晩とおつとめ参加者に賦與することになりました、念佛票とは「南無阿彌陀佛。往生之業は念佛を以て先とす」と記載してあるカードです。精勤念佛票も同様なカードであつて、これは導師入道場前に着席したる念佛者だけに賦與することとしております。此念佛票は一票五十錢とし、毎十日目ごとに支拂はれ、收容老人の小遣となります。

精勤念佛票は年四回位、精勤し且皆勤した念佛者を表彰し、之に金百圓を表彰金として、被表彰者にあげています。

これらの念佛票の賦與は、收容老人に念佛をすすめるについて、結局はまことに妙味のある方法だといえますので今も尙繼續して、老人から喜ばれつゝ念佛奨励の一役を果しています。

次に實行いたしましたことは、法然上人の御教に順つて、念佛を第一とする生活を奨励いたしました。當院ではモツ

トーとして「何人も勤勞せざるべからず」と指示してありますが、これは人たる者の生存の意義からでたことでありますが、又老人等の老衰化の防止にも役立つことであります。院ですゝめてゐる第一のお仕事、第一の勤勞は、念佛を申すことであると定めて、實行させました。

「口稱念佛」は、健康舎にいる老衰者は勿論、附屬信樂病院内のベットに横臥したきりの老病人にも、これだけは申せます。或者はねながら合掌が出来ますし、或者は片手だけしか合掌に手を上げられません、又或者は合掌のできないものもありますが、老衰性痴呆症その他の精神病者を除いて、ベットにいる老病人等も念佛口稱の勤勞だけ出来ます。そこで當院の勤勞奉仕の第一の業は「口稱念佛」であることを、全院に徹底的に教えました。

そして朝晩の念佛の「おつとめ」は法圓寺講堂でいたします。その「おつとめ」はそのまゝアンプ（傳聲管）によつて附屬病院各病室へ全部放送されて病老人はそれに合せて念佛を同唱いたしています。

「おつとめ」が終了すると、導師は病院にまいり、各室を巡廻し、共にお十念を同唱いたします。これも朝に晩に導師のおつとめとしていたしてまいりました。

かくして滿十年、院内には念佛に歸依する大いなる精神が生れてきてゐることが感得できます。院内の雰圍氣に念佛が醗酵しきたれることが感じられます。

院外と院内とは、自然に結界ができていたことが、心眼に分明でありまして、われらは念佛の法域にはいつていゝと感ずることが出来ます。その間昭和二十九年までに、神奈川縣から三回、厚生省保護課から一回、「憲法第二十條による信教の自由を沮害するもの」として御注意及御通告を頂きましたが、其事實なしと返答をして「おつとめ」をさわりなく實行いたしてまいりました。

(四)

當院法圓寺に集合してお念佛の「おつとめ」の場合には座り方は、半跏趺座、靜座、安座、その他の足のわるい人は適當にしてよろしいとしております。

導師に對して、首を下げすあげ、腰は伸ばすようにして座らせ、老人の腰の曲るのを矯正する目的も含めており、前の人にそろつて整然と座ることとしております。

道場參集の百二十餘人は導師と一團となつて同音にて、腹からの聲をだして念佛を同唱する。(故大島徹水大僧正の加行の際の念佛は腹の聲にて申せとの御言葉による)

法然上人の御法語に「人の手より物を得んするに、すでに得たらんと、いまだ得ざると、いづれが勝べき、源空は得たる心地にて、念佛は申すなり」とあります、又一枚起請文中に「唯一向に念佛すべし」とあります。

そこで當院では、既に「阿彌陀如來に依つて救はれたり」

と信じて、唯一向に念佛を申すばかりであります。

當院「おつとめ」の念佛は、常に百二三十人が同席同唱するので、一同と一字(な、む、あ、み、だ、ぶ)を一呼吸でとなへ、六字を、六呼吸で唱和しています。なアアアと生み字を十回唱へる位の長さ、六字をとなへますと時間にして一分三十三秒位に當るでしょう。

六字を、各個に、明瞭に、雄大に、腹からの聲で稱へる聲は高からず低からず、一字一字、念々相續して稱えていきます。

此念佛を増上寺法主椎尾弁匡大僧正台下は「法圓寺流念佛」又の名「健康念佛」と御名付け下さつています。

一同と朝晩の「おつとめ」に此念佛をとなえていますと、自ら我執を離れ、我欲を離れ、たゞ念佛の聲のみという心境にはいります。

さて此の一向念佛の功積つた滿十年の院内には、どういふ變化が起きてきたでしょうか、これが本稿の重要な課題であります。

(五)

念佛一行の滿十年の結果をいへといわれましても、仲々大問題であります。ここでは院内の老人一人一人について全部と申すのではなく、養老院という集團として眺めた觀察を申述べるものであることを先づ御了承願いたい。

法然上人の御歌に「いけば念佛の功つもり、死なば浄土へまゐりなん、とてもかくてもこの身には、思ひわづらう事ぞなき」とあります。

院内には六十歳以上九十歳迄の收容老人（平均年令七十三歳です）がいて、年中、朝と晩と二回二時間の念佛……（中には不斷念佛をつとめる老人もいます……）……を申しているのを加算してみても、念佛の功がつもつてまいりますと、だん／＼我欲が少くなり我欲を離れて、念佛定力（私は念佛力と申しています）が生じてまいります。すると院生（院の收容老人を院生といいます）全體に、態度として、眞面目な姿が現はれてまいります。一堂に集合した際には、第一印象として、眞面目な精神がひしひしと感應してくることを覚えます。

院生の生活、そのものに反省、さんげ、忍耐、感謝等の諸徳が、顯著に現われることに驚ろかされています。

従つて院生の各室の共同生活には和合と共生との精神を最高の道德としている事實が現れています。

養老院の經營上最も大切なことの一つは、院生が院内に心からの深い落着きができることとあります。院生が院を終の住家と定め、自分の家であると觀念して、足ることを知りその分に安んずる心が生ずると、やがて生死を超える安心立命の心境に立つ基となります。健康寮舎に住む院生中に、この心境に立つて周囲の院生から、多大の尊敬を拂

はれている老人を發見します。又病院のベットで死期を知る老人が、念佛によつて、天命に隨順し、安心して死ぬる覺悟のできた老人がだんだんと眼につくようになってまいります。

かく念佛の功が積りますと、院内には信仰と健康との雰圍氣が漲つてきて、院内の各處に、感謝報恩の業や、陰德をつむ者等、善事善行が自然に生れ、他人の善行に隨喜する所業が現れてきています。（本年八月十六日表彰）
これらが、念佛の功をつんだ當院の昨今の姿の描寫であります。

昔。私共は養老院を知らば知るほど、長生きすれば恥多しであり、「嫌がられの年齢」と文士の方から批評され世人からは呪はれて、長生は人間の惡業かと、老境を忌避する思いを抱いていたことがあります。念佛の功積つた今日東京養老院々内が明るく、朗らかとなり、健康的色彩が強くなり、視察にきた社會事業の専門家からも、公平な監督官廳からも、又私共の尊敬する學者たちからも、一應の敬意を表せられる程度となると、われらも老境に入つて、靜なる、大なるよろこびを味うことができ、熙怡微笑の心境も味得できる日の近づきつつあるように希望の光がさし込んで來るを覺える次第であります。

昭和三十一年・八月十九日起之……

（社會福祉法人東京養老院長）

つれづれなる心

「つれづれなるまゝ」といふのは徒然草に出ずる有名な句である。これは普通には、退屈とか無聊というような意に解されている。然し、それでは未だ眞に「つれづれ」なるところを理解しているとは云えぬだろう。

それはたゞ單なる退屈とか無聊徒然の寂しさではない。まことに生きている事そのことについている形而上的な寂しさである。それはうつつろう世界にふれてゆく心の警めである。まことに、うつつろうもの——變化する者、時間的に存在する者——の中にあつて、しかもおのれ自らがまたうつつろうものとしてその中にながらえている、その上流轉のさなかにうつつろいあい、つつ流れてゆく、この變轉のなつかしきうつつろあい——照應——、響き合いこそ——

この「つれづれ」なる寂しさであらう。

うつつろうものにとりまかれ乍ら、おのれ自らも又うつつろう存在として萬象に對している。果敢なきものの中に、自らも又果敢なき運命を分け持つて支えているのである。それはまことに在ることそのことの寂しさである。徒然草の「つれづれ」はかゝる寂しさの餘いである。かゝる悲しみの餘情である。

時のうえに浮ぶものとしての萬象、時間の中に在るものとしての自己、一切はたゞ時と共に流れ、時間と共に消えてゆくある時の「姿」にすぎない。時のうえにあるもの、ある一定の時の姿ということを一「ひとときの」とか「かりそめの」という。ひとときの或はかりそめのというから虚しいのではない。たゞ

すぎゆく「時」のある姿であるという事をいっただけである。流轉こそ時の本質である。變化こそ時の眞諦である。まことにひとときののものであればこそなつかしい。果敢なき、哀れさといつても何も甘い感傷に浸つてゐるのではない。それは感傷以上の感動であり、主觀以上の大きな現實感である。

自分の生、他人の生存、この世の諸々の相、あらゆる存在、それ等はみな時のうえの相である。時のうえの姿であることをうつつろうものという。

つれづれなる心は、人間的存在そのものに根ざした形而上的なる寂しさである。そしてまたそれと同時にその寂しさから内的解放を得たものの靜かな芽えた心でもあつた。寂しさによろこびとがそこにある。悲しみと自由とがそこにたゞえられている。

このつれづれの心の深さを領くことが、み佛のこゝろの深さを理解する一つの手懸りである。

さびしさに堪へたる人のまたもあれな庵、
並べん冬の山里（西行）

回顧保護司三十年

林田智源

昭和三十一年五月三日、憲法發布記念日に當り、不肖圖らずも、藍綬褒章拜受の榮譽を賜りました事は、誠に身に餘る光榮で、只々感激致して居る次第でございます。

今度、本誌より「回顧保護司三十年」という題を戴きました。が、別に御参考になるような事は書けません。が、浮ぶまゝ過去を反省しつつ、綴らせて戴きます。

古い言葉に「日進月歩」というのがありますが、過去三十年間に、保護法ほど發達したものはないかと思ひます。大正十二年に少年法が出來、昭和十四年に司法保護事業法、昭和二十四年に犯罪者豫防更生法、昭和二十五年に更生緊急保護法、保護司法、昭和二十九年に執行猶豫者保護法というように、發展して参りました。

これは人間「性は善なり」で、犯罪者は、意志薄弱、悪い環境に抗し切れなかつた、氣の毒な人々である、罪をにくんで人をにくまず、社會共同の責任に於て、更生させようという考へであるから、最も進歩した法律だと思つてゐる。

大正十二年少年法が布かれて、最初東京九段靖國神社の側に、東京少年審判所という役所ができ、吾宗先輩少年保護司も勤務されていた。私が少年保護司事務囑託となつたのは、大正十四年九月で、其の頃保護司の採用は、宗教家か、教育者が多かつたので、吾宗からも立派な僧正方が澤山囑託保護司になつて居られ、私も三十足らずの若輩で、僧正方の仲間入りをさせて戴いたので嬉しかつた、淨保會

という集りがあり「今でもある筈だが」時々今のケース研究會的な懇親會が催された。

この仕事は免囚保護といつて、早くから先輩僧正の方やられていた事で、佛の慈悲に生きる吾等の當然なすべき仕事であるから、數の多かつたのはいうまでもあるまい。

其の名も少年保護司から、司法保護委員、保護司など、變つたが、補導精神には聊かの相違も無い筈だと思う。其の頃は対象者も少く、少年保護司も今の一保護區に一、二名程度で、僕は〇〇先生と、〇〇先生の子供をお預りしている等といつて、現在の様に、昭和十一年（觀）第何百何十何號等という數字はなかつたように思う。

少年審判所の數も三箇所となり、五箇所にふえ、保護觀察所となつて、現在のようになつて各府縣に設けらるゝ事となつたが、これには色々の理由もあろうが、社會より犯罪を無くすのには、定期刑だけでなく、教育刑が必要だといふ考へに變つてきたからである。

昭和十四年に司法保護事業法が出来て、少年保護司も司法保護委員と變り、假釋放者が多くなるにつれて、委員の數も非常に多くなり、制度化されるようになった、これは戦後の社會情勢の悪化から、犯罪者は激増するし、收容施設は戦災を受けて激減する等の理由もあつたし、又受刑者のパロール制度が實施せられ、刑期の三分の一を過ぎれば、假釋放することが出来るといふように變つたせいもある

つた。

保護委員も成人、少年と別れる事になり、各委員の希望を聞かれたが、其の時私は少年の方をやらして貰うようにした。保護の成績というか、楽しみというか、保護觀察の期間が長いだけ効果があると思うたからである、成人の方は、假釋放期間の短いのが多く其の結果が判らない、然し少年の方は、大概温かい家庭があり、將來性があつて補導の仕甲斐があるように思はれたからである、今でも成人の対象者を預るよりも、少年の対象者をもらつた方が嬉しい氣がする。

犯罪者豫防更生法は「犯罪をした者を教育し、社會的に改善して、その犯罪性を抑壓することにより、社會福祉の増進を圖るのを目的とす」というのであるが、何が難かしといつても、更生保護ほど困難な仕事はないと思う。

こういう話がある、或る寺へ一夜強盜がはいつた、貧寺なので與へる財物も無かつたので、住持はまだあけない布施を思い出し之を渡した。受取つて直ぐ歸ろうとしたので、其時住持は之はお前に施すのだ、一寸禮をいへと申して送り出した、處が後日檢舉せられて、取調べを受ける身となり、寺へはいつた事を自白し、住持の取調べをした處「本人は何も盗んではない、氣の毒な奴だと思つて惠んでやつたのだ」と、本人の無罪を言張つた、盜人は住持の慈愛に感じ、改悟の涙にむせび立派に更生したという事で

ある、これは話しかも知れないが、御互い佛者はいつもこういう氣持で居たいものである、本人の心の底から悔悟、發憤しなければ眞の更生はない筈だ。罪を憎んで人を憎まず、犯罪人といへども個人、個人に會つてみれば、おそろしい氣持など微塵もなく、親しみを感じ可愛い氣がするものである。

長い年月の間には、無心された事もあり、食事を與へ、泊りもさせ、時には盜難にあつた事もあつたが、我が子がやつたと思へば、さほど腹もたゝず、自分の足らざるを歎いたものである。友人保護司から君は對象者に甘すぎる等と忠告を受けた事もあるが、自分の氣性でよい補導の出来ない事を悲しく思つてゐる。

辻の石地藏が「おれは言はぬがわれ言ふな」というたが、暗い人間の心にも、佛性の輝きが見えて更生保護に心がおどる。

然し今自分の歩いてきた過去を振り返つて見ると、恥しさで一杯だ、何の確信もなく徒らに忙しく、警察署に行き民生安定所や職業紹介所を尋ね、裁判所、刑務所へと足を運んだだけで、どれだけ本人の更生に役立つかと思うとくやしくなる、たゞ對象者の番人でも務めていた様な氣がしてならない。

成績良好等と報告したが、果して其の對象者の何人が、一生を通じ神佛の心に恥じない、生活を續けることが出来

たろうかと思う時、宗教家としての保護司の價值が、どれだけあつたかと恥じ入る次第である。

現在全國には五萬二千有餘の立派な保護司が居られ、其の中には宗教家なるが故にという方も多いと思うが、どうか宗教家としての立場をわすれず、佛の慈悲を對象者に與へて戴きたいものである。

尙附くわえ度い事は、一般社會の方々が、この仕事を大變理解して下さるようになった事だ、初めは物好きな人がする仕事の様に思はれて、一般の御協力等は全然得られなかつたのであるが、此頃は各地とも更生保護助成會というものを経成されて、保護司の活動、社會人の覺醒にと、大いに協力して戴ける様になつた事である、憶へば誠に隔世の感が致します、御互いに一日も早く明るい社會、犯罪のない世の中を、作りあげるよう勤めようではありませんか。

貴い紙面を借り、自分の及ばざるを謝すると共に、諸師が再び私の歩んだあやまてる轍を、踏まれない様にと祈る次第であります。

(横濱慶岸寺住職)

×

×

×

×

兒童福祉にささげるまでの



私の幼少年時代の環境

小 川 金 英

青少年と共に遊んで三十有五年、その私の幼少年時代をふりかえつて見る。

私は貰い児であつたと云うことを知つたのは十八歳の秋のことであつた。貰い子／＼と言はれて泣いて家に歸つた事も度々あつたが、兩親始め家族の皆はそれを堅く否定した。

特にその様な事を云う子供の家庭に行つて、文句を云うのは祖父の役であつた。私は續いて二人も乳兒を失つたと云うこの家の若い母の許に生れて間もない乳のみ兒で貰はれて來たのだそうである。生母の乳房から離れた私は幾日幾夜を泣き明したと云う。しかし失つた兒えの愛情を一身にうけて蝶よ花よの喻えの如く可愛がられ近隣の人々にも

うらやまれる日常であつた由である。

この家は地方の名望家であり又相當な財産も有し特に信仰の厚い、何不自由の無い暮しであつた。私がこの家に貰はれて來てから次々と子供が生れて都合四人の妹弟の兄となつたが兩親の愛情は何等變ることなくそゝがれた。

特に七十の坂を越した、祖母の可愛いがりは格別であつた。小學校にのぼる頃まで背におんぶして歩いたり、食事の世話も箸で養つてくれる有様で小學校入學後も一人では登校せず、必ず祖母か女中が付添うて放課になるまで待つて居てくれるのであつた。

そんな習慣は遂氣儘と依存性のみを強めて行つたのでした。そして弱々しい性格は友達も取り得ず、金や物をみつ

ぐ事を以つてグループ参加の一條件としてゐるのだつた。

そんな事の爲に親に嘘を云うことを餘儀なくし、偽つて金をせがんでみつき、或時は誤魔化す事さえ覺えた。祖父や祖母の財布から五十錢銀貨を失敬する事も覺えた。そんな事によつて友達を待遇するものだから友達もよく遊んでくれたし、私の言うこともよく聞いて遊んでくれた。その中にいつとは無しにグループのリーダー格になつてしまつた。

遊び道具も揃つてゐるし、家も廣い處から近所の友達を集めては色んな集會をする集になつた。幻燈會、運動會、お話會、特に虫や蛙の墓をつくつておがむ遊びや、葬式ゴツコなどもやつた。お宮も庭の一隅につくつたりもした。リーダー格になつて行い得る満足を私は勿論両親も喜んで見ていた。依存性の強さから小學校の宿題も何も彼も皆他人の手にゆだね四、五年頃までの學業成績は良い方ではなかつた。六年生頃から少しは上昇して來た。

特に得意の童話の口演は先生にほめられるまゝ得々として教室の人氣を博していた。

この頃から家に不幸の芽が出始め、可愛いがつてくれた祖母は長い病床に死亡した。初めて遇つた不幸、然し私には嬉しかつた。弔問の人々の出入りや、大勢の集會、法事の菓子、葬列への参加、忌中の詠歌や和讃、ませた兒だと云はれる程、皆んなと一緒にそんな行列や行事に参加

した。

ところがこの不幸を發端に續いて父が長の病氣、収入の途の絶えた私の家庭は遂家産を傾けねばならなくなつた。父の病氣の快癒を祈つて晩秋の午前四時、もの淋しい鎮守の森のみ社に三七二十一日の祈願もこめた又靈驗あらたかだと聞えてお寺の門前の荒神様にも百日の日參した。しかし藥石遂に効なく父は死亡した。父の死亡と共に田畑も山林も人手に渡した。進學の望を胸に試験勉強にいそしんだのも今は不爲となり、希望を失つた十六歳の私は、高等小學校卒業と同時に天秤棒をかついで魚の行商をする事になつた。慣れぬ格構で田舎道を行商する私は、不案内なその地域のこゝとて、仲々賣行はなく泣けて泣けてならなかつた。

ささやかな私の働き、この天秤棒にかけられた行商は弱い母と九十歳になる祖父と四人の妹弟の生活を立てゝ行かなければならなかつた。夏の休みで歸郷した級友の夏服についた金釦がどんなにうらやましく、にくらしく感じられたか知れない。然し背負はねばならぬ生活の中心十六歳の私にはそれは重擔であつた。加えて借財の返済等遂に土藏始め住家の一切を明け渡さねばならなかつた。

町の顔役だ、財産家だとの羽振りも今は一變夢と化して借間住居のどん底生活に落ちてしまつた。餘りの轉落、逆境に母は病みつき、これ又父の跡を追う様に四十一歳で私

の十八歳の春、私の名を呼び続け乍ら死んだ。それは残された幼ない子供達を哀願するかの様に、

昔に變る落ぶれたこの親子に、然も肺病と聞いては誰一人見舞つてくれる人とてなく、寂しい病室に冷めなくなつて行く母の手が固くなるまで取付いて泣いたのだつた。住家を失つてから客馬車を挽く業についた。朝早くから驛と町の間をラツパを吹き乍ら馭者臺に馬を追ひ客を運ぶこの商賣は少年の私にはいやで仕方なかつた。この頃私は初めて實母にそして兄姉と云う人達に逢つた。然し私にはそれ程の親愛も湧いて來なかつた。然し實母はやはり蔭から泣いて私を見ていたそうであつた。終日疲れ切つて歸つて來る私に、今は待つていてくれる母もなく、誰一人慰めてくれる者ともなく、只米代を要求されるだけであつた。誰にでもいゝ心から甘えて見たい。誰れかにとつぷりと抱かれない様な氣持、愛情に滿されぬ寂しさに随分惱みもした。

愛し合つたつもりでも利害の調和しない時は戦狼の群の様にさえなるのであつた。せめて自分の家ばかりも明るい家庭にしたいと努力もして見た。怒り度い時に強いて怒らぬ様に、不満の時も強いて不満の心を握りつぶす様にもつとめたが、そんな不自然な堅い道德律はいつまでも續く筈はなかつた。荒む氣持は遂に厭世的になつて死の淵をのみ込む事が二度三度あつた。

あと一、二分で危ういと云う處を線路から引ずられて氣付いて見たら年老えた祖父と友達の父が私のそばに立つていた。そしてその言葉はと切れ／＼に震えていた。連れられて歸つた家の薄暗い電燈の下で、妹弟達が抱き合つて泣いていた。私はこの姿を見て、物云はず床にもぐり込んで思い切り泣いた。親を失つてこのかた愛情はおろかその日の食さえ滿し得ずにいるこの家族、只頼りにするは兄である私だけではないか。と思うと、死んだ方がましだ、などと考えた私は何んて馬鹿だつたかと思はれて泣き乍ら『馬鹿々々』と齒を喰いしばつて聲をのんで叫んだ。

そしてどんな苦難をも忍んでこの妹弟達の爲に生き抜こうと決心した。そして私はこの頃からお寺に足を歩んだ。絶えられぬ心の一切を佛様の前にぶちまける様に泣いて禮拜もし誦經もした。住持からお話も伺つた。又與えられた佛書も讀んだ。然し仲々難解で直ぐは解らなかつた。でも何んとなしにおがんでいるうちに何かしら心安さが感ぜられる様になつた。そしていつかしらかたくな心の扉が開けてさゝやかな明るさが持たれる様になつて來た。私には誰れも味方になつてくれるものはなく、愛してくれる者もなく、全くの獨りボツチだと思つていたが、祖父や妹弟達はこの荒み切つた私を信頼もし愛していてくれるのだと云う事が解つて來た。いやそれだけでなく周圍の人々社會のすべてをあげて私を抱いてくれるのだと感ぜられて來た。私

は他人から愛して貰いたい。愛情を得ようとあせつていて、これ程私にふりむけられている愛情生かして下さるお力に氣付かずにて、愛していてくれる人を愛することを忘れていた事が恥かしくさえ思はれて來た。私は嬉しかつた。私は住持に懇願して入門得度することにしてそれはこの寺の十夜法要の結願の夜の事であつた。この宵、佛前に私は念佛の一生を兒童教化に特に不遇な子供達の相手となり育てゝ行く事を誓つた。

客馬車を業にしながら子供會を開設した。出發の合間を利用して馬車の中で子供達と子供會も開いた又子供達を馬車に乗せて野原に連れて行つては遊びたわむれたり、昔噺を聞かしたりした。

段々町の好評が高まつて來た。そして協力者も出來て來た。お寺に少年少女光明會と云う集りを持つ様になつた。お寺の小僧であり、客馬車屋であり、子供達の先生である私は以前と異つて明るいきそして張り切つた日々が送られて來た。青少年の教化に兒童福祉に献身すると誓ひ合う同志が五人十人と集つて來た。毎夜のように研究に口角泡を飛ばして話し合つた。

今は進學した同友へのうらやみも、呪いもうせて、生計の不如意も忘れた様に兒童教化に福祉に、念佛の喜びにその朝を迎える様になつた。折から東北地方を悲嘆と困窮のどん底に落し込んだ昭和八、九年の冷害には三キロ程離れ

た農村の困窮家庭の兒を集めて給食托兒所を開設し男の保母さんと笑われもしたが同志の女青の手傳を得て數ヶ月に涉つて保育に従事し然も別に一ヶ所をも兼任して指導に當り遂病床にたおれるに至るまでの歡喜行をした。こうした幼年時代から青年時代に至る生活の變遷の中に或はボーイスカートを起し保育事業を開設し子供會の育成に縣下を巡廻する等、今にして見るに盲蛇の喩のそしりはまぬがれざるも、よくこそ努力がつゞけられたものと思はれる。こんな事が切つかけとなつて佛教青年會が生れ、子供會の後援者達を中心に大人の佛教の集りが生れ、私は又方面委員やら少年教護委員社會教育委員等々目まぐるしい程の日常も光明の一途に奉仕された。こうして兒童福祉と教化と取組んで三十有五年、今は親となつてゐるその當時の子供達に先生と呼びとめられたり思い出話をされたりすると、恥かしい思いのみするがほのぼのとした懷舊の情が湧き起つて來る。

岩手縣花卷市松庵寺住職
岩手縣社會福祉協議會副會長
全國社協民生兒童委員協議會兒童部會副部會長

×

×

×

×

ホノルル通信

—第六信—

ホノルル浄土宗別院にて

松 濤 弘 道

よく日本人は知的好奇心が旺盛だと云われています。確かにそうと思われるふしが多く見受けられます。特に都會の自稱インテリと云はれる人に多く見られる様です。時世、いや流行に遅れる事を極度に嫌いますから例えば新しく現われた思想や事柄が、ゲテ物で、あつたとしても、何か西洋的な匂がすれば無難作に飛び付いて行く様です。内容の如何を問わず、それらの心酔者にとつては西洋的なものなれば良いものであり新しいものなのです。

そしてそれを身に纏う事によつて自分が近

代的になる事が出来ると固く信じている様です。この西洋一邊倒の迷信（あえて近代人の迷信といふましよう）は古くは明治時代より今日に至る迄、劣等意識の副産物として日本人に付き纏つて來ました。世の指導的な立場にある人がそうなのですから、いわゆるミーチャン、ハーチャンがヘップ、バーン刈りにマンボスタイルで闊歩するのを笑えたものではありません。「淀みに浮かぶうたかたの如く、かつ消え、かつ結んで、久しく止る事」が無い様に、昨日流行つたものも、今日は闇の彼方へと葬り去られて行く。日々の新聞、ラジオは次々と新しいニュースや問題を提供してくれませんが、私達の耳にとどめる余裕も無いうちに過ぎ去つてしまふ。そして私達の日々の生活は、ピカソやマチスの畫を觀賞に行くかと思えば、お茶、お花と禪三昧にふけり、シネラマを観た歸りにオデンで一杯きこしめし、家に歸つてはベートヴェンに浪花節といった様に異質的なものを無難作に取り入れて行く。この矛盾を矛盾とも思はず、絶えず浮動して新しい餌物をねらつてゐるブランドンの様に、本當の主體性を持たない人達には、それが例えとるに足らぬものでも新しい故に攝取し、そして忘れた様に排泄して行く。

この極端から極端に走る脱皮作用といふ、

知的好奇心といふ、これも云わば日本人の個性の缺除による宿命的な結果なのかも知れません。では何が日本人をしてこの様な個性のない國民に仕立てたのでしょうか？ その理由も色々と考えられますが、つきつめて考えてみると、どうもその原因が日本人に根強く食入つてゐる家族制度にある様です。世界各國を見渡してみるとこの家族制度の片鱗をフランスや英米の舊家庭に見出せぬ譯でもありませんが、日本人の様な滅私的國民性は世界に類が無い様です。その家族制度を培かう家の構造そのものがユニークな存在と云えるでしょう。極く常識的にみても、西洋と日本の住宅の本質的な相違點は、西洋では各々の部屋が厚い壁によりて仕切られていて他人から私生活が覗かれない様になっていますが、日本の家屋では部屋が簡単に唐紙、障子で仕切られていて常に他人の監視の下に共同生活を営む様に出来てゐます。ドアに鍵一つかければ外の世界から容易に隔離される西洋では、他人に氣兼ねなしに個人生活が享受出来るのに反して日本では他人の目をうかがいながら自分を犠牲にし、遠慮しながら群居生活の安寧を保つて來たとも云えましよう。はたして家屋の構造が其處に住む人々の行動を規定したのか、或はその意識がそれに調和する家屋構造を要求したのかは簡単に結論づける事は出

来ませんが、日本にあつては嫁も姑も一つの屋根に住む事を余儀なくされ、個室を持つだけの余裕もなく、これに倍加して、勞働力としての子供も數多く生産しなければ家庭が支えられない經濟的貧困が日本の家屋にみられる様な簡易な大廣間の雜居(群居)生活を余儀なくさせたのだと云つても過言ではないでしょう。そして、この共同生活を營むにあつては秩序を保つ必要から、權力者として君臨している家長が絶對の權限を持つ様になりこれがひいては主從關係を根強く蔓らせる一大原因になつたと思われまゝ。アメリカの人類學者ルース・ベネデクト女史は日本人の生活心理を解説したその著「菊と刃」の中で、日本の主從關係は「一方では一家團樂の雰圍氣を通して巧みに家長の支配權が確立し、他方、女性の過重勞働によつてます」その地盤は強固なものとなり、更に傍若無人のかまへによつて上下の「ふさわしい地位」「身分」の列序が確立されて行つたのである」と述べています。では何故多くの人々は個性を捨て、まで家長及びその延長である主君に忠節を盡し、その無暴に甘んじなければならなかつたのでしょうか？ 何故多くの人々は大きいものに卷かれる事をいさぎよしとしないながらも、自分の主張を曲げてまでも他人に追従しなければならぬのでしょうか？ この問

題の結論に達するには幾多の原因が考えられますが、つきつめて考えてみると結局は社會の安寧という名の下にその背後に横たわる經濟的不安定感がそうさせているのだとしか、即ち、何といつても日本人の各自が經濟的に獨立していかない事が日本人から個性を引き擧つてしまつたのだと考えられるのです。それはそうでしょう、もし私達の生活が完全に保障されると云う見通しがつけば何も自分の主張を曲げてまでおべつかを使う必要がないでしょう、いつ何時就職の道が斷れても他人から生活を脅かされなかつたら平氣の平左でしょう。しかし悲しいかな、日本では最底生活否、明日の生活さえ見通しのつかぬその日暮が實情なのですからこの状態をいくらかでも改善しない限り、今迄通りの滅私奉公の生活は誰が何と叫ぼうが、改良されるはずがありません。この經濟的貧困(あまりこんな事云いたくありませんが)と家屋の構造から醸し出される獨特の雰圍氣が、日本人をして滅私的、消極的、全體主義的人間に仕立て上げ、個性があつてもそれを表面に出すと身が危険に曝されるので絶えず自分の心にドアを設けて内心だけはのぞかれたいと云う防禦手段を構はるのです。丁度これは家屋の構造の上から見て西洋人は個室の獨立により私生活が確保されているので部屋のドアに公私の障

壁を設けるのに對し、日本人は家の周圍に垣根をめぐらすことによつて一應公私の區別をつけ、その中の雜居生活にあつても心の避難所を求める爲に自分の心を兩様に使いわけ、その間にもう一重の障壁を作つていとも云えるでしょう。ですからよく西洋人が日本人をみて、悲しい時に笑つたり、無闇に遠慮したり、成べく感情を外に表わさないで、しかつめらしい顔をしているのを見て理解出來ないといふ云つていますが無理も無い事です。

ですから個性があつたとしても、それは抑壓された個性であり、表面から見たら日本人には一様に個性がない様に見えます。そしてその抑壓された個性、即ち内心が他人から覗かれた時には或る時には怒となつて爆發し、或る時は前回に述べた様な羞恥心となつてあらわれるのです。此の様に日本人の虛榮心から掘下げて、個性の缺除の原因を家族制度に求め、それを支えるものに家屋構造と日本の經濟的狀態を掲げましたがこの家族制度と云い佛教はその日本人の精神に如何なる影響を及ぼしたのでしょうか？ この問題については多少紙面を要するので次回で述べたいと思いますので今回はこれで失禮させて載きます。では皆さん御氣遣よう。

信心要訣

——念佛行者の記録——

安居香山

我等の住める世界を地球と言ふ。

地球は宇宙の一部分にして、大自然と共に生ず。これ大真理の姿なり。これを佛教に於て大法身阿彌陀と言ふ。

衆生は此の自然より分れたるものなる故に自分と言ふ。

されば、阿彌陀佛は一切衆生の大み親にして、衆生はそ

の子なり。而して阿彌陀は無限の慈悲と、無限の光明と、

無限の壽命との大精神の持主なり。

吾等子たるものは、眞實にこの親にしたひ、親に戀し、

親の御名を呼ぶ事により、その關係を深くする事を得る。

この親子の深い關係を親縁と名づける。

此處に於て吾等衆生の救はるゝ道がある。

何が故に名號を稱する事に依り救はるゝや。佛の本願力

の功德に依るなり。

吾等はこの事を信じて稱名する。即ちこれ「疑ひなく深く信じて南無阿彌陀佛と喜び稱ふ……」

××××××××××××

淨土教概論のような前掲の一文は、父が「當家代々歴史」と題して残していた、厚い記録の序文とも言ふべきものの一節で、表題は「信心要訣」とされていた。

五六年前、父はこの文を私に見せて批判して呉れと言つた。一生百姓で過ごし、昔の小學校しか出ない父にしては、誠に素晴らしいこの文に感服した私は、暇をみて寫し取つて置いた。父は信行とともに眞剣な念佛行者であつたの

である。

この父が、去る八月十五日、盆歸りの精霊と共に朝露の如く此の世を去つた。而も終に、あれ程までに申した念佛にも救われる事なく、自己の矛盾した姿に悩みつゝ死んで行つた。いや、救われて居たのかも知れない。善知識の念佛により、どんな極悪人でも救われるのであるから、あの様に念佛し続けた善人の父が救われぬ筈がない。きつと救われて居る。私はそう信するのだ。

しかし、目に見る晩年の父は常に苦悶して居た。三惡道に落つべき人間、いや落ちて居る自己の姿に苦悶して居た。そして、それ故にこそ申さねばならぬ念佛であるのに、何故か四五年前にはビタリとこれを止めてしまつた。漸くこの頃、又申し始めた父には、過去の如き歡喜念佛の姿はなかつた。そして終に、父は、そのまゝの悩みをこの世に留めて、娑婆を後にしてしまつたのだ。

× × × × × × × ×

悲しみの葬儀も終つた一日、私は父の悩みがどの様であつたかを知りたいと思ひ、生前父が愛讀して居た佛書や、何か書き残したものはなかと文箱を探した。フト且つて父に見せられた「信心要訣」なるものを思ひ出し、急いで「當家代々歴史」を取り出してめくつて見て驚いた。それがないのである。破り取られて居るのである。いつ取られたか知らぬが、破り取つた後だけが、異様な紙の切れ目を

のぞかせて居た。そして、この「歴史」は、次の様なものから始まつて居た。

當家傳訓

- 一、神佛祖先の御恩を忘れず大切に致す事
- 一、彌陀の本願念佛の六字を日夜專唱す可き事
- 一、忠孝仁義を守り、人世を渡る事
- 一、家内和合し、家事を勉強する事
- 一、諸事儉約を旨とし、當家を繼承す可き事

右條々確守す可し

昭和二年一月

二代主 安居忠次郎作書

幸い「信心要訣」は、私が寫して置いたのが、法然上人御法語集に入れてあつたので、これを再度見ることが出来た。しかし残念なことに、後半は何處かへ無くなつて居た。そして、當初こゝに掲げたものが、今残つて居る。前半の全文である。この後の方には、念佛の有難い所以を述べ、それ故に子々孫々に至るまで念佛を懈つてはならぬと懇々と戒めてあつた様に記憶して居る。が残念なことに、どの様な文であつたか私の頭には残つて居ない。

× × × × ×

「當家傳訓」でも分る様に、父は非常な念佛行者であつ

た。何時頃からか分らぬが、少くも私の生れる以前からのことであるらしい。今日でも續けられて居る「念佛會」と言うのがある。これは、菩提寺に有志が木魚を持ちよつて毎月二十五日に別時念佛會をやるのである。この會は大正十四年に、父と、善之丞と言うもう一人の念佛行者とが發起人になつて作つたものである。それ程に早くから念佛の行者であつたのである。

未だ六七歳の頃、野良から歸り、暗い電燈の下での夕餉も終り、行水のような風呂に入り、暗い夜道を、父母に手を引かれて念佛會に行つた記憶が、私の腦中深く印象づけられて居る。五燭の電燈の下、廣い本堂で十人程の人が懸命に念佛をすることは、私は母の膝まくらで心よい眠りに落ちてゐることが多かつた。

寢ても、さめても、それこそ厠でも自ら湧き出る様な父の念佛は、その懸命な日常生活とともに、村の評判であつた。そして父は水飲み百姓から、今日の安居家を築いたのであつた。

一帯に佛教信仰の盛んなこの地方では（滋賀縣愛知郡稻枝町）こうした信者は決して珍しくはない。そして、朝夕はどここの家からも家内中の讀經の聲が聞えて来る。三歳の童子も坊さん並みの經を讀むと言つても過言でない。

寺では何か事ある毎に盛んな法要が営まれる。そして必ず晝から晩にかけて説教がある。村中をあげてこれに參詣

することは言うまでもない。そして父の信仰は、こうした還境と、その影響とから芽ばえたものなのであろう。

たゞ聞くだけでは濟まされぬ父は、進んで説教師に質問に出かけたり、菩提寺の住職にたゞしたり、自ら佛書を求めて讀んだりした。そして、父の佛教に關する知識は、又大したものであつた。その一つのあらわれが「信心要訣」であつたのである。

× × ×

何故父は、この「信心要訣」を死の直前に破り捨てたのであろうか。捨てねばならなかつたのであろうか。

こゝに、父の悩みが何であり、どのようなであつたかの一端が知られる。即ち父は、あの様に堂々と掲げた信心要訣——多分それは昭和二年に書かれたものであろう——と、

近時の父の心狀と行狀とに大きな違い、更には矛盾を感じ、恥を後世にさらすことを恐れ、これを處置して行つたのであろう。

しかし終に、父は自己の悩みを何者にも訴える事なく、唯自己のなかにこれを包藏し、僅かに書信の形で私に訴えたのみであつた。そして遺書らしいものも、私に與えんとした手紙の下書き以外は、何も見出し出すことが出来なかつた。私は、この中から父の悩みの一端を見てみたい。

× × ×

昨年春、父母は幡隨院に来て、半月程念佛生活を樂しん

だ。父の近況を見て、少しでも喜びの念佛が申せる様にし
てやりたいと思つて老人二人を連れて來たのであつた。こ
れには父は随分喜んだ。そして御禮の便りを、久々に筆を
取つてよこして來た。その時に

大正十四年念佛會を發起し死と言ふ事は安心して、念
佛生活に邁進し、貧乏世帯であらゆる事を切り抜けて來
ました。

然るに昭和二十五年以後、夜分少しも睡眠せず、動物
の中で笑ふのは人間に限るのに、人様と對談しても笑ふ
事が出來なくなりました。よつて人生を楽しく暮した事
がありません。三惡道に落ちて居る様な氣がして至極殘
念です。佛の本願は疑はぬけれど、前に述べた次第、生
存中間並みの生活にと念願です。

とその苦惱の狀を訴えて來た。これより先、父は一寸した
病氣をした。老人の憂鬱症の様なものであつた。しかしこ
の病氣があつた爲に父の惱みが出て來たのか、この惱みが
あつた爲に父が憂鬱症になつたかは分明でない。しかし、
平靜になつた父には、何か人生が面白くなかつた。笑う事
が出來ないものを感じて居た。死も恐れず、本願を確と信
じ乍らも、人生が面白くなかつた。そして、面白くないと
感ずる自己の姿が、三惡道に陥つた様に感ぜられた。そし

て、終に、念佛さえも口にする勇氣を失つてしまつた。

戦後の社會の混亂と、世相の轉變は、味氣ないものであ
つた。そして父はよく、この事を慨歎して居た。こんな事
も父をこの様にした原因の一つであつたであらう。又戦後
經濟の混亂は、農村に非常な影響を與えた。或る者は闇で
榮え、或る者はその結果又失敗没落した。これも又その一
つであつたかも知れぬ。

しかし父には、もつと深い人間的な惱みが潜んで居た。

それは、生と死の谷間に置かれた人間の宿命的な悲劇とも
言うべき姿えの反省であつた。「毎席」と言う事實の諦觀
は、人間の宿命的事實の凝視であると共に、又その超克で
ある。そして又それは殘された唯一の逃避でもある。佛教
はこれについて説くところ誠に綿密であり、周到である。

信仰に生きた父が、これについて父なりの人生觀を確立
し、死を超克し、超生淨土を信じて居た事は、前掲の殘さ
れた文に依つて知ることが出来る。そして、譬え念佛を申
さなくなつた晩年さえも、この事への確信はゆらいでいな
い。にも拘らず、父は人生に對して何故か興味を失つた。
自己が救はれる事實とは別に、この世の營みに喜びを感じ
なくなつて來た。頽廢した社會への反逆か、自己の長い人
生から來た結論か、ともかく笑つて生活する事に馬鹿々々
しさを感じ出した。厭離穢土欣求淨土と言うことが、實感
として味はれて來たのであらうか。

私はこれに對し、眞面目に人生を考える者は笑つて等いられぬ。笑つて居る内に人生を終る人は、本當に人生を考へて居らぬからだ。一寸先は暗黒である。それ故にこそ念佛を申し、その中に喜びの生活を發見せねばならぬと悩む父に強張した。

しかし、父の悩みは仲々に解けなかつた。そして、最後に残された遺書らしい私あての手紙の下書きの中にも

幡隨院で念佛三昧生活でもしたら如何と思ひ、而も御念佛なら三ツ谷(町名)でも唱へられるが、日々本當の喜びが出來ぬので苦しんで居ます。如何にしたら安心の生活が出来るかを御考へ下さい。

と、切々の苦悶を訴えている。而も、來年菩提寺で行われる宗祖七百五十年遠忌大法要を楽しみにして居ると書き乍ら、終にそれを待つことなく、世を捨てゝしまつた。

× × ×

何故に父はあれ程の念佛行者でありながら終に喜びの生活に入り得なかつたのであろうか。果して念佛は、この様な人の悩みを解き得ないのであろうか。これへの解答は、様々に爲され得るであらう。

私は、集つた念佛會の人々に、

「もう一步、父が踏み切つて念佛を申してくれたら、こ

の悩みは解けたでしよう。生じつかな知識が、逆にまたげとなつたのかも知れませんが――

と私なりの解釋をして、益々念佛にはげむ様にとすゝめた。しかし、この解釋にも、私は自信がない。

そして私は、あの様に悩んだ父ではあつたが、「本願は疑わぬけれども」と言つたあの信仰の基礎の上に、最後の瞬間には、自己の救われて居る事を信じつゝ、死を迎えたに違いない。

生じつかな頭でするこれ等の私の解釋より、身を以て念佛して來た父に、最後の勝利は歸して居るであらう。かく信じて私は父の冥福を祈つてゐる。(幡隨院住職)

特 志 寄 附

一金千圓也 北山良祐様

前田繁子様

和田正系様

右御芳名を掲げ、御尊志に厚く御禮申上げます。

法然上人鑽仰會

極樂浄土は實在するか

佛教文化シリーズ(三)・佛教文化研究會發行
結城令聞著・浄土教への新視覚・三〇頁三十圖

相當年輩の、自分自身はしつかりとした念佛信仰を確立しているが、現代の青年である自分の子供達にはこれをどお説明したらよいだろうか。青年達は浄土の存在など、頭から否定してしまうのだが。こういった質問に對して、結城博士が佛教文化研究會の講演(東京銀座・日本堂時計店四階・毎週土曜)で回答されたのが本書である。

こういった質問は實によくきく。と同時に深く自分の信仰をふりかえつてみると、この疑問が、信仰を得るか、得られぬかのわかれ目になつてゐるようである。結城博士は人も知る現代眞宗學人の最先端に立つ方で、唯識學の深い造詣の上に、近來は眞宗教義、特に教行信證をとりあげた。新しい學説を主張されてゐる。

「浄土實在」の問題は、眞宗に限らず、本宗にとつても至重なる事柄であるので、敢えてここに寸詔をこころみ次第である。

この質問に對して、博士は二つの面から答えを導き出されている。それは、浄土教の眞理性格ということと眞理の浄土教的性格ということとである。詳しいことは反つて原意を

ゆがめるおそれがあるから省略するが、要するに、浄土とは色々といふ具體的に説かれているが、それは「そのまま、無相であり、平等一如であり、秩序や人格を超越したような説明がされてゐる」のである。それなら、何故浄土を極樂華麗なものとして表現するか。それは「佛教の眞理を具體的に示せば何であるか」ということをあらわすためである。と、天親・曇鸞兩師を引用しておられる。

それよりも、もつと根本的な問題は、浄土を「あるとか、ないとかいう面から理解しようとするのは、實は、正當な理解の方法ではない。」「我々がそういう問題にすぐぶつかつて行く態度というものは、本當に浄土、如來を理解する態度でなく、浄土、如來を理解す

るためには、別な態度と方向とがあるのではないか」ということである。何故なら、佛教の古來の典籍を通じて、今まで「お浄土や如来様が實在するとか、しないとか」ということについて、それを問題として論じているものが一つもない。ことからしていうことが出来る。従つて結局浄土はそういったあるなしの問題から考えるべきではなく、もつと、ちがつた角度から考えられねばならぬ。それを博士は「觀法の對象」として説かれたものであるとされている。そして、あるなしにこだわつてゐる人には、本當の浄土は求められぬことを示唆されている。

それでもなお、浄土とは一體あるのかないのか、とせまつてくる人のために、博士は因果の理法を以つて答えられる。すなわち、佛教の根本原理である「因果の理法」に立つ限り、浄土はなければならぬと結論されている。

まことに、むづかしい問題を僅々三十頁の小冊子の上で處理されていることには、博士の學問的手腕に預るところが多いであろうがそれにもまして、博士の學問を裏打ちしている、強烈な眞宗信仰の、説きつきしてやまぬという、ほのほの如き熱情が感じられるのである。(N・T)

なお「浄土」の問題について、本宗學匠の論考を、十二月號の特集として豫定しておりますから、御期待下さい(編輯部)

眞葛ヶ原問答

第一部

萩行建堂

概説

法然様の勅修御傳に、安元元年、上人四十三歳、夢の中で支那の善導大師、半金色の御姿を以て、上人と相見へ給うと傳へます。この物語を演題とし、問答にて、南無阿彌陀佛の、六字名號を説くものです。上人の御教を、圓具教と讃歎する學者があります。この問答劇は、この立場にて上人、その門下並に、法流の善智識の御教を参考としています。二部作中、前席に、阿彌陀如來を、後席に、南無する人を説き、次で登上人物の、自問自答にて、佛と人の關係を明し、結論は、南無阿彌陀佛の念佛は、その一念々々、そのまゝが人法一體の妙境に住む、非淨非穢の最勝人その當體たる事を表はさんと願うものです。

演出内容

眞葛ヶ原問答—問答形式による布教

登上人物—三名—觀音（勢至）甲、乙二名

囃子方—二名—木魚、鉦鼓、太鼓

注意

一、出演者は、臺本を讀み交し、臺詞の暗記を要せず

前席

。歩行調の囃子にて觀音、登上、本堂内陣、前卓にて參詣者に對す。

服裝—冠、假面、蓮、法衣

。面目調の囃子にて、問答者、甲、乙、左右より登上、

服裝—法衣

甲「ヨ—ウ、これは、お久し、——何處へ」

乙「これは——私は、今から問答説教を聞きに」

甲「エ？」

乙「三人でする説教劇ですよ」

甲「三人で——初耳だ——私も行きましょ」

乙「阿彌陀様は、今、極樂で、御說法中と聞きますが、どんな節でしよるネ」

甲「ア—ハ、——何を云いますか——佛様の御說法は、菩薩様の悟を開かんと、聞へませんヨ、節が、あるやら、ないやら、極樂が、あるとか、ないとか」

乙「そこで、お坊様に、極樂は、本當にありますか、と尋ねるとムニヤ—く無いと答へ、それでは、無いかと聞くと、ムニヤ—くあると答へる。そのムニヤ—くが解らないんでネ。あつたりなかつたり、本當に迷うワイ」

△兩人、腕を組み思案、その中、甲、觀音様に氣付き

甲「アハ、私は氣付かなんだ、此處に、觀音様が、立つて居られた。私達の話、聞いて居られた」

乙「何を云います。石佛、石觀音に、話が解りますか」

甲「ところが——觀—世—音と、名乗つて居られますヨ——世間の話を聞くとネ」

乙「そうネ—では、念の爲に、聞いてみましょ」

△兩人、觀音様の前に坐り、合掌

甲「觀音様—、お伺い申し上げます—」

△問に應じ、觀音、蓮を持ち上ぐ、兩人吃驚、

觀「コ—レ、驚くな—、ワシは、問答説教に、御出張の生觀音じやお前達の解らぬ事は、何んでも聞くがよい」

乙「ハイ—、ア—ノ—、佛様は、何處に、居られましたようか」

△觀音、聲を改め

觀「よい哉—、よく聞くがよい。今、お前達、宿善の花開き、佛を聞く。ワシは慈悲の心を以て佛を説かん」

兩「南無阿彌陀佛—、ア—ノ—解り易くお諭し下され」

觀「では——今、お前達が、南無阿彌陀佛の、お念佛を稱へたノ—その念佛を、六字の光明名號と云う。お前達の問う佛の御名は、

六字が中の四、阿彌陀佛じや」

兩「ハイ—阿彌陀様」

觀「今から、二千五百年も昔、印度に生れ給うた釋迦如來様がこの阿彌陀如來の、廣大無邊の御德を説かれたのじや。御修行中が法藏比丘、その修行満足し佛自身、その國土、並に衆生濟度の本願成就して、阿彌陀如來と號せられたのじや」

兩「ハイ—阿彌陀様」

觀「その阿彌陀如來の御德の廣大な事——諸の佛は、その御德の中に住み給い、その御德にて、衆生を濟度し給う」

兩「ヘ—」

觀「その御徳を、阿彌陀如來の——御働き——法と云うのじや、佛法の法じや」

兩「ホーウ」

觀「そうじや、——佛の法、——まことの法じや——佛は、そのまことの法そのものじや」

兩「ハイ——」

觀「法の佛とは、法の御身、即ち法身じや。法の御身であるから、汝達の目で拜む事も——その手で觸れる事も、出来ぬ——が——何時も生き——生きて、生き通しの御身じや」

兩「ヘエー」

觀「法の御身は、縁を頼り——事々に、無礙に生き連ける。

専門語では、物心一如の、宇宙大生命の、法則に随つて動く流れを云う」

兩「ウーム」

觀「解り易く、譬へれば、世の中の一切の動きは、統一、變化、調和の法則を繰返して止む事が無い。これは、法に随つて、生るとも表現される。宇宙大生命も亦然り。その變化とは大生命の、いつまでも、生きゆく原因であり、その調和とは大生命の、よきにく——と生きゆく、原因なり」

兩「ウーム」

觀「要を、とつて言へば、阿彌陀如來の廣大無邊の御徳とは、自らいつまでも、よきにく——と生きつけ、又一切を、よきにく——と生かし續ける宇宙大生命の法の御身を指す」

兩「ハイ——」

觀「漢字で示せば、生き續け——とは、無量壽の三字、よきにく——とは、無量光の——三字なり。お經文に、光明無量の故に、阿彌陀と云う、壽命無量の故に、阿彌陀と云うと説かれて居るではないか」

兩「ハイ——」

△觀音、讚歎

偉なる哉、偉なる哉、宇宙大生命

それは、一切の源因であり、一切の結果である。阿彌陀如來と號す。

彌陀の大智、大意志は、天則、藏性とて、世を造る、

彌陀の大智、大慈悲は、光明、本願とて、人を契す

兩「世を造る、人を契す」

觀「そうじや、この大生命の顯れを、お經文に、青きに青き光、赤きに、赤き光、白きに白きと説かれ、花は紅に柳は緑、毫光を放つと説く、このワシは諸法實相、除滅罪法と説く、鳥の飛び、犬の走り、人の働く、これが如來實相であり、如來業である。生きゆく、あるがまゝの姿、即ち如是相なり」

兩「ウーム」

△兩人、理解に苦しむ。

觀「ウームか、その困惑した顔、その苦しい返事、お前達は正直者だノ。ワシは、眞佛、眞土を説き、その無縁の大慈悲に及ぶ。

この大慈悲を悟り、讚歎の一念起らば、これを菩薩の悟と云う——

「この人法一體の境地を悟り、身を以て證せんと、二年、三年と月日を重ね、修行する専門家が多いぞ——事實、難信難解じやノ——」

兩「觀音様——アノノ解り易く御願ひ申し上げます」

觀「ソウ、この難信難解の故に、眞佛、眞土の不可思議光如來と稱さる。こゝで、この、まことの佛の不可思議を、この目で拜む最も易い法がある」

兩「どうぞ、教へて下さいませ」

△觀音、須密檀上の木像を指差し乍ら

觀「本堂、須密檀上に、立ち給う阿彌陀如來——」

兩「エー」

觀「不可思議の眞佛を、この目で拜む様に、表象されしものぞ」

兩「エー」

觀「須密檀の型を見よ、——これは宇宙光明法界を表はす。その上に立ち給う佛は、われは宇宙光明身なり、本願成就身なりの御心を表はす」

甲「へーエー、あの——古ぼけた木像様で御座いますか」

△觀音、暫し間を置いて

觀「子供を育つ、世の親の慈愛の顔——それと同じく——生けとし生ける一切を、わが子と見給う阿彌陀佛——この寂靜、この半眼思惟の御顔こそ、阿彌陀佛の衆生に、應同し給う御慈悲の御姿ぞ」

兩「ハイ」

觀「そこで、宿呂ある人には有難く、宿呂無き人は、たゞの木像と見る。ワシの勧めは——汝達悉く、阿彌陀如來に皈命せよとノ。なぜつて——お前達の住む國土を觀よ——山高く、地味の瘠せた四ツの島、大自然の恵みに漏れた國——働けどく、わが暮は——と歌つた詩人も居る。その貧しい國土に、現實に生を受けた汝達——汝達の生きる道は、たゞ一つ、その道はいつまでも、よく生きたい——の道心なり。この道心、これを悟るところに、營々と共に働く勤勞、創造の喜びがある。その喜び——それが、そのまゝ、阿彌陀如來の、不可思議光に照らし出された姿なり。世間には、山に籠れ、籠に打たれよ、鹽斷ち、斷食して、佛の智見を開けと勧める教がある。然し、汝達——よく觀よ——汝達は——その爲の時間。その資力にも恵まれざる、島國に住む大衆なり」

乙「ハイ、毎日く働き続け、この暮を守るに、手一杯です」

觀「ソウ、その働く大衆の爲にこそ、阿彌陀如來の、お慈悲があるなり。何等、この爲に、勞する事なく、拜むだけで、よく生かし給う阿彌陀如來の御心を覺る。佛、——大悲の至れるもの——他力の極まりと覺るべし」

兩「ハイ」

觀「同じ道理で、西方に極樂ありとの御諭しも出るのじや、本來無東西の大法界に、十方佛土を説き、而も、その中、殊に、西方とお定め下さるゝは、汝達の心に、決定心を與へ給う佛の慈悲なり。されば、念佛、合掌さるゝところは、何時でも、何處でも、汝の眞正面は、西方淨土でありなり」

兩「ハイ〜」

觀「佛師一刀、三禮す、その木像、佛事を爲し給うと説かる。汝達は、國の寶と尊ばるゝ佛を拜むであらう。そうして、その威嚴に心打たるゝであらう」

兩「ハイ」

觀「その様に、木像様、又は繪像様を通して、阿彌陀如來を拜む——更に深く説けば、この表象こそ、まことの阿彌陀如來——その御方とノー」

兩「南無阿彌陀佛〜有難う御座います〜」

觀「この慌者奴、どこが有難い、ワシは、佛と、その表れを説いてゐるのじゃ、未だ汝を説かず、汝と佛の結びを説かず、従つて有難くなる譯が無い」

兩「エー」

觀「それで、このワシに、佛を問う、お前達は、お前達自身の本心が解つてゐるかノー」

△兩人、顔を見會せ、不審相、

甲「アノー、私の本心」

觀「そうじゃ、阿彌陀如來に、通ずる本心じゃヨ」

乙「アノー、自分の〜」

觀「そろ〜問答説教の時間じゃ、遅れて、聞き損ずると聞不具足と叱られるヨ。今は、これまで」

△觀音、蓮を拜ち直し、寂靜、不動相に入る。

兩「困つた〜有難いと言つて叱かられた。その上、お前の本心は

どうじゃ〜と聞かれる。解らなくなつた。困つた〜」

△兩人、頭を抱へ、困つた〜の身振、やがて、立ち上り、歌、

昔きく、善財童子は道き〜に、

野を越へ、山越へ、五十三、

善智識を、たづねてぞ、觀音菩薩に、會つたとヨ、

△囃子、歩行調にて、甲乙、互禮、左右より退堂、

次で、觀音、一匝退堂、

(つづく)

十一月豫告

- 共生のつとめを通し阿彌陀佛を觀る吉原自覺
- 佛教美術より觀たる阿彌陀佛 小島章見
- 童話 鬼の念佛 内山憲尙
- ホノルル通信―第七信― 松濤弘道
- 尾張通信 林 晩香
- エゾ高僧の觀化和譚 須藤隆仙
- 信仰問答 萩行建堂

浄土宗

「日常勤行式」解説

浄土宗の勤行式について

讀經の意義	渡邊 眞海
香 偈	松瀨 誠康
三 寶 禮	佐藤 良智
奉 請 文	藤井 實應
略懺悔文	藤木 隨教
三 尊 禮	谷部 禪雄
開 經 偈	吉水 大信
歎 佛 偈	中野 隆元
法 語	福富 海岳
念佛と回向	佐藤 賢順
四弘誓願	小澤 勇貴
三 身 禮	佐藤 密雄
送 佛 偈	戸松 啓眞
	眞野 龍海

○一部三十圓 送料八圓
○十部以上送料當方負擔
○三十部以上一割引

法然上人讃仰會刊

後 記

ついでのパージは再思三省してお読みいただきたいもの。

○黄金の波にのつて今日も念佛の聲が高らかに響いてくる。諸處方々の寺院でお十夜會の法要が年々盛んに行われて居るのは喜ばしいことである。深まりゆく秋の一とき、自己を深くみつめる眼を失つた現代人が、しずもりの中に度しくも厳しい自己懺悔と阿彌陀佛に生かされる悦びを感じつゝ念佛に勵しむ姿はまことに尊い。

○今月は特に、社會事業の面に獅子奮迅の御活躍をなさつてゐる諸師より貴重なる玉稿を頂戴致しベージを飾ることが出来たのは何よりです。

○會員皆様にも、尊い御體驗も多き、自己を深くみつめる眼を失つた現代人が、しずもりの中に度しくも厳しい自己懺悔と阿彌陀佛に生かされる悦びを感じつゝ念佛に勵しむ姿はまことに尊い。

○會員皆様にも、尊い御體驗も多き、自己を深くみつめる眼を失つた現代人が、しずもりの中に度しくも厳しい自己懺悔と阿彌陀佛に生かされる悦びを感じつゝ念佛に勵しむ姿はまことに尊い。

○然し、いかなる法要でもそうであるが、それが餘りにも興業的な雰圍氣の中で行われるとしたら堪えられぬ事であらう。法要である以上ある程度の演出効果は考えねばならないが、と云つて實質が伴わずして興業的價值にのみに終始するようであつてはならない。法要はあくまでも、莊嚴にして嚴肅に且つ眞摯に營まれねばならない。

○吉田絃二郎先生が亡くなられて早くも半年、吉田家より「吉田絃二郎句集」が出された。編輯子も一部御惠送いただいた。美麗な装釘、一句々々に生前の先生の御姿が思い出される。

○今年もあます處、二カ月、次號には阿彌陀佛特集號を、十二月號では浄土特集號を豫定いたしております。

○今年もあます處、二カ月、次號には阿彌陀佛特集號を、十二月號では浄土特集號を豫定いたしております。

○上に廣告の様に、浄土宗「日常勤行式」解説が出来ております、他に發行建堂師の「眞葛ヶ原問答」その他をトラクトにて刊行の豫定しております。(水谷)

○上に廣告の様に、浄土宗「日常勤行式」解説が出来ております、他に發行建堂師の「眞葛ヶ原問答」その他をトラクトにて刊行の豫定しております。(水谷)

會費(誌代)

半年二〇〇圓・一年四〇〇圓です。前金切の節は、精算通知を致しますから、折返し御送金下さい。御送金は便利で安全確實な振替を利用して下さい、千圓まで二五圓の手数料で且、通信も書けます。新しい市は必ず縣名を、又、新規か繼續會員かを明記して下さい。

「浄土」十月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可
昭和三十一年九月廿五日印刷
昭和三十一年十月一日發行

(定價三十圓)

編輯人 竹中 信常
發行人 佐藤 密雄
印刷人 春山治部左衛門
印刷所 共立社印刷所
東京都品川區上大崎一ノ七八三
發行所 法然上人讃仰會
振替 東京八二一八七番

特價奉仕

- 一、寺院用佛具類一式
- 一、在家用佛壇、佛具一式

多少に拘わらず御用命或は御紹介下さい

東京都江東區深川三好町一ノ五長專院不動寺脇

區役所前

正本堂佛具店

電話深川(64)五八四八

御袈裟法衣御調進

- 錦金欄
- 御水引
- 御幡
- 特種織物
- 御打敷
- 稚兒衣裳

御法要に梵鐘供養に新裝の稚兒貸衣裳を精々御下命の程を

増上寺

宗務所

大正大學

芝中高校

淑徳學園

御用達

東京都港區西久保巴町一〇六

野村法衣店

電話芝(43)〇四二八番
振替東京七八九四五番

幼稚園 運動遊具

全國幼稚園・保育園・小學校・各團體に、良品を廉價にのぞ
ツトで、堅牢安全な遊具を納入、好評を頂いております。松
答・光明・芝・明照等の浄土宗幼稚園採用。



篠澤鐵工所

東京都大田區堤方町718
電(75)1024(池上驛東3分)

銀ブランコ2人乗	¥ 13,000
銀ブランコ3人乗	¥ 15,000
銀ブランコ4人乗	¥ 22,000
銀ブランコ6人乗	¥ 26,000
椅子ブランコ4人掛	¥ 13,500
太鼓橋	¥ 10,000
ジャングルジム中型	¥ 28,000
單式滑臺中型	¥ 23,000
復式滑臺中型	¥ 36,500
動物付き遊動木	¥ 30,000

此他各種、一報力タロク送

配達費(都内横濱500圓以内
其他1000圓以内)組立無料。

小田原・熊谷・土浦以遠は丸通
送り、(荷造費當社・送料着拂)

組立説明書送付